

小 学 校

平 成 4 年 度

教育研究員研究報告書

社 会

東京都教育委員会

全体研究主題

一人一人の児童が意欲的に学習し、社会生活の意味について自分なりの見方・考え方を深めるための指導の工夫

目次

1. 中学年分科会	一人一人の児童が、具体的活動や体験を通して自分とのかかわりで地域社会の生活をとらえ、追究していくことができる指導の工夫	2
2. 第5学年分科会	一人一人の児童が、産業や国土の様子について自ら問題をもって追究していくことができる指導の工夫	8
3. 第6学年A分科会	一人一人の児童が、歴史的事象を自分の見方・考え方で研究する指導と援助の工夫	14
4. 第6学年B分科会	一人一人の児童が、歴史的事象について自ら考える力を見につけるための指導の工夫	19

今年度より実施された新教育課程は、生涯学習の基礎を培うという観点に立ち、21世紀を目指し、社会の変化に主体的に対応できる心豊かな人間の育成を図ることをねらいとしている。「自ら進んで考え、判断し、自信をもって表現したり行動したりできる創造的な資質や能力の育成」が強く教育に求められている。児童が社会の一員として行動し実践していくことができるようになるためには、社会生活の意味について自分なりの見方・考え方を深めることが必要である。一人一人の児童の興味・関心に根ざし、個の学習を成立させるために、教師はどのように児童の学習を支援していけばよいのか明らかにしたいと考え、上記の研究主題を設定した。研究の推進にあたっては、各学年ごとに分科会を構成し分科会研究主題を設定して、授業実践を通して主題の究明に努めた。

一人一人の児童が、具体的活動や体験を通して

自分とのかかわりで地域社会の生活をとらえ、追究していくことができる指導の工夫

I 研究主題設定の理由

中学年の社会科では、生活科の中で具体的な活動や体験を通して身につけてきた身近な地域社会に対する興味や関心をどのように発展させるかが課題となってくる。また、児童に、自分も地域社会の一員として生活しているという実感をもたせ、地域を愛する心を育てるとともに、地域に積極的にかかわっていこうとする態度を育てていくことが必要である。

そのためには、中学年の社会科では、児童が具体的活動や体験を通して自分とのかかわりで地域社会の生活をとらえ、地域社会の生活に自ら課題を持ち、その課題を追究し続けることのできる学習を展開していくことが重要であると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

一人一人の児童が、地域社会の生活を自分とのかかわりでとらえ、意欲的に追究していくための具体的な活動や体験、および教師の援助（支援）の在り方を明らかにする。

III 研究の仮説

- (1) 児童は、具体的な活動や体験を通じた報告会や情報交換などの報告活動をくり返すことによって、自分と地域社会とのかかわりに気付き、意欲的に追究することができるであろう。
- (2) 教師が一人一人の児童の見方・考え方を生かす援助（支援）を、児童の調べたり表現したりする活動に即して行うことで、児童は意欲的に追究していくことができるであろう。

IV 研究内容と方法

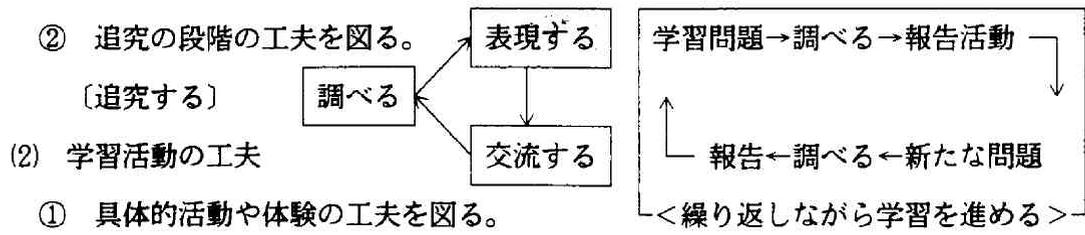
児童は具体的な活動や体験的活動を通じて調べたことを知らせたいという願いをもっている。自分で得た情報や事実を発表することで得た喜びは、新たな追究の原動力を引き出すことができる。加えて、児童が個々に調べて得た情報や事実を交流し合うことで、新しい情報を得ることができ問題解決をさらに進めることができる。こうした追究の段階の活動としての報告活動は、追究意欲を高めるために有効であると考え、報告活動の方法の工夫を試みた。

1. 追究意欲を高めるための報告活動の工夫

- (1) 学習過程の工夫 —— 追究の段階の工夫を重点とする。

① 学習過程の明確化を図る。

社会的事象との出会い→問題に気付く→問題を明らかにする→解決への計画を立てる→追究する→まとめる→深める（生活に生かす）、という学習過程を構想する。



- ① 具体的活動や体験の工夫を図る。
- ア. 共通基盤としての具体的活動や体験を行う。(共通の体験など)
 - イ. 問題解決(追究)のための具体的活動や体験を設定する。(個別の体験など)

② 具体的活動や体験を通した報告活動を行う。

ア. 報告活動の特徴

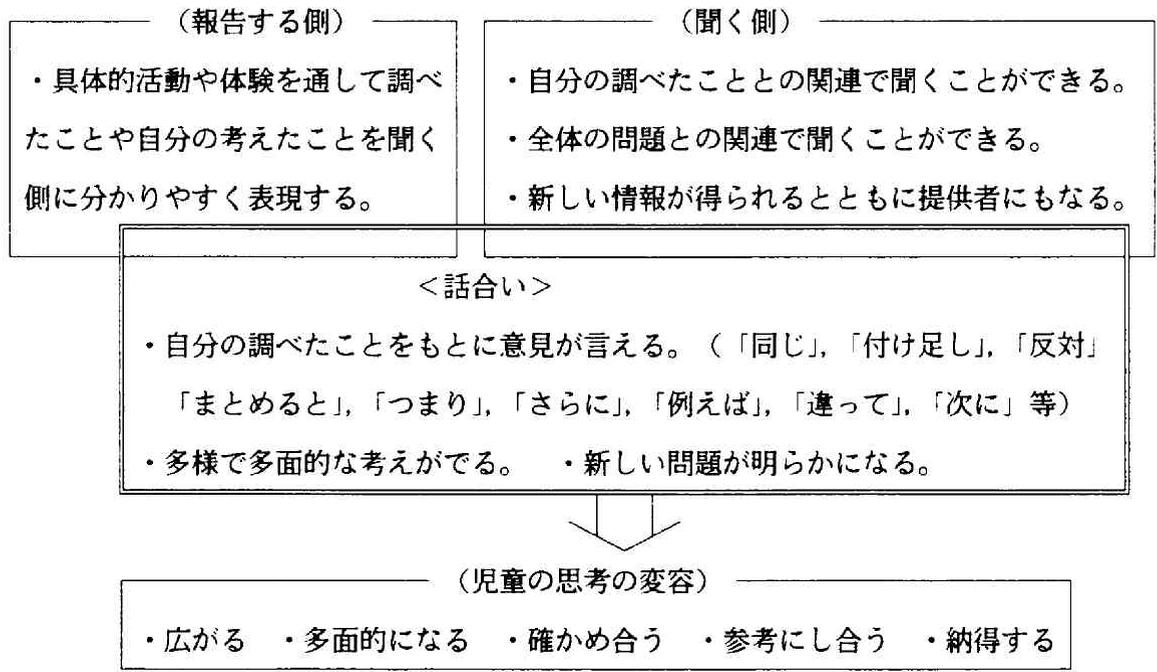
- ・繰り返してできる。
- ・表現する場が多くなり表現技術が高まる。
- ・新しい知識や調べ方を子ども同士で交流することができる。
- ・子ども同士で相互評価することができる。
- ・気軽に言える。
- ・地域や地域の人々を今まで以上に知ることができる。

イ. 報告活動の内容

- ・調べ方 ・目的 ・予想 ・発見 ・驚き ・感想 ・意見 ・今後の見通し 等

2. 報告活動の方法(望ましい報告活動)

具体的活動や体験を通して明らかになったことをもとに、報告する側と聞く側が関連をもって話し合い、多様で多面的な考え方を出し合えるようにする。報告者は提案者としての役割を果たすことになり、聞き手はアドバイザーともなる。



3. 追究意欲を高めるための報告活動への援助（支援）・評価

(1) 援助（支援）の方向

- 出会いの段階で、共通体験を通して大まかな方向性をもった学習問題をもてるようにする。
- 調べ方や報告の仕方などの学習の方法が学べるようにする。
- 共通基盤としての具体的活動や体験をもとに自分なりの考えをもてるようにする。
- 観察・調査活動で明らかになったことを表現方法を工夫して報告できるようにする。
- 全体の問題との関連で報告したり、聞いたりできるようにする。
- 自分が観察・調査活動で明らかにしたことと対比して報告が聞けるようにし、意見・質問・情報の三つのカードを活用し主体的に学習に参加できるようにする。
- 新たな問題を整理し、継続的に取り組めるようにする。
- 児童の観察・調査活動で明らかになったことを事前に把握し、報告する側と聞く側が関連をもって話し合えるようにする。

(2) 評価の視点

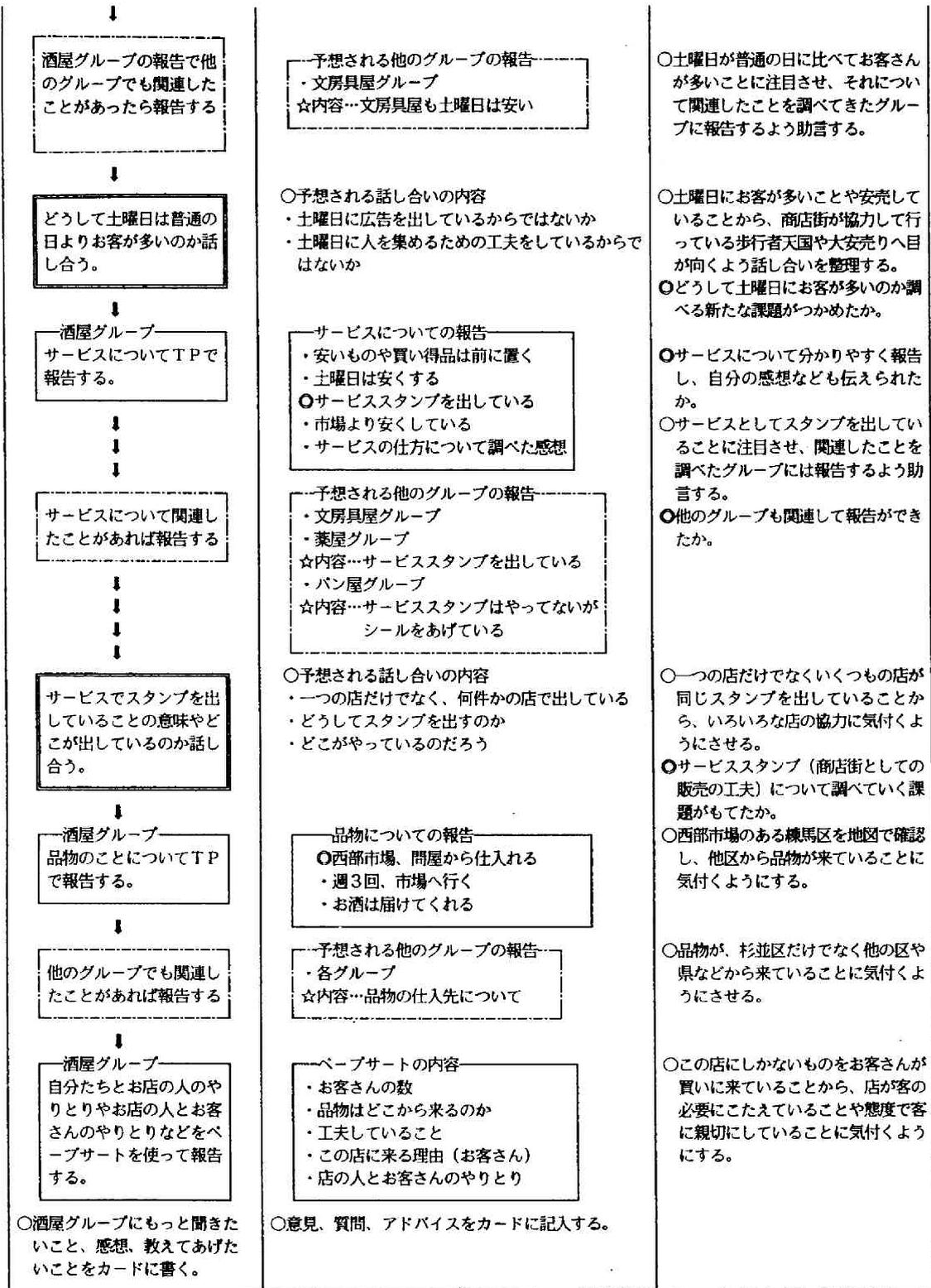
- 必要な情報を収集し、整理することができたか。
- 自分が調べたことをもとに、表現方法を工夫し報告することができたか。
- 報告をもとに話し合い、自分なりの考えをもつことができたか。
- 報告活動を通して新たな問題を見つけ、調べることができたか。

V 実践事例

1 単元名 3年 「わたしたちのくらしと商店や商店がい」（18時間）

2 単元の目標

- (1) 自分たちの町を中心とした地域の商店や商店街の様子について調べ、地域の人々は、品質や価格などを考えて店を選んだり、品物を購入したりしていることや、商店や商店街では、お客が買い物をしやすいように販売について工夫していることを理解する。また、自分たちの地域は消費生活を通じて広く国内外の地域とも結びついていることにも気付く。
- (2) 家の人の買い物や商店・商店街の販売の様子について、観察したり調べたりしたことを学級で報告する活動を通して、消費者の考えやそれにこたえる売る側の工夫について理解を深めるとともに、新たな課題を見い出して追究する意欲をもつ。
- (3) 品質や価格などについての消費者の願いや商店・商店街の工夫を自分の消費生活と結び付け、よりよい消費者として行動できる。



(3) 評価

- ①報告会で友達の発表を聞いたり、話し合いに参加することにより、商店の販売の工夫や買う人の工夫についての考え方が広がったり、深まったか。
- ②さらに調べてみようとする意欲をもつことができたか。

V 本時の考察

本時の報告会では、1時間に1グループだけの報告であった。この点は改善すべき課題であるが、児童は最後まで集中して、意欲的に取り組むことができた。

その理由として、まず、今回の報告会が「八百屋の見学」に続き、二回目であったため報告会に慣れていたことが考えられる。それは、一人一人が学習問題をつかみ報告会の方向性をしっかりもつという共通基盤ができていたこと、さらに、報告する側の報告の内容・方法・形式などがよく工夫されていたと同時に児童の動きにも無駄がなくスムーズであったこと、そして、聞く側も、自分たちの調べたことや、経験したことなどをもとに、疑問点を質問したり、共通した内容を報告したりするなど、関連をもって話し合えたことなどからとらえることができる。二番目の理由として、聞く側の児童に対して教師が効果的な援助(支援)を行うことができていたことである。まず、報告活動に関連のあることや、もっと調べてほしい



ことなどの意見の交流が活発にできるように事前に一人一人の追究の実態を十分に把握していた点である。さらに、板書計画に不十分な点はあったものの、重要な内容は意図的に取り上げ、全体の場に広げたり、わかりにくい内容は解説や補足をしたりすることにより、思考の整理を行ったことである。これらのことによって新たな課題をつかむことができたと考える。

VI 研究のまとめと今後の課題

学習活動の追究する段階で、具体的な活動や体験を通じた報告活動を繰り返し設定し、これを徐々に積みかさねることで、児童は学習の手順がわかるようになった。また、学び方が身についてきたために、学習の見通しをもち、自分なりの考えで追究方法を確立することができた。報告活動では、自分の調べたことを皆に知らせたいという児童の願いを果たし、気軽に皆の前で発表し、話し合えるようにした。児童は、友達に認められた喜びが新たな追究の原動力となり、自信を持って次の課題へと取り組めるようになってきた。

報告活動を成立させるためには、児童のそれまでの活動や体験の質・量に違いがあるので出会いの段階での共通体験の場を設定することが大切である。また、報告活動は、「ごみのゆくえ」「商店街」など自分自身で繰り返し調査できる地域学習で特に効果的である。今後の課題としては、報告活動をより効果的にするために、報告活動の形態の在り方や、年間指導計画のどの単元での活用がより効果的であるかを明らかにしていくことである。

一人一人の児童が、産業や国土の様子について

自ら問題をもって追究していくことができる指導の工夫

I 研究主題設定の理由

これからの子供たちが、21世紀の社会をたくましく心豊かに生きていくためには、社会生活の各方面で直面するであろう大きく急速な変化に対して、主体的に対応し、様々な生活上の問題を自分自身の考えと判断で解決していく力が必要である。

そこで、これからの学校教育においては、上記の時代的な要請を受けて、どちらかというところ画一的で固定的な知識を一方的に伝達しがちであった従来の教育の在り方を大きく転換していくことが強く求められている。

その新しい教育の在り方を児童像で表すとすれば、「一人一人の児童が、……自ら問題をもって追究していくことができる姿」となるであろう。

それは、「個の学習が成立した姿」とも言える。具体的には、一人一人の児童が、教師の適切な支援や児童相互の学び合いの活動を通して、自己の内発的欲求に基づき、しかも価値のある学習問題を把握し、自分に適した方法で追究・表現することにより、社会的認識を深め、問題解決の成就感・満足感を体得することができたときの姿と言えるだろう。

私たちは、第5学年の産業や国土の様子の学習を通して、児童一人一人が、自ら問題意識をもち、それを自分の問題として意欲的に追究していくことができるような指導の工夫を研究することが大切であると考え、主題を上記のように設定した。

II 研究のねらい

児童一人一人の問題意識を大切にしながら意欲的に学習問題を追究させるためには、調べる段階における学習活動をどのように工夫したらよいかを明らかにする。

III 研究の仮説

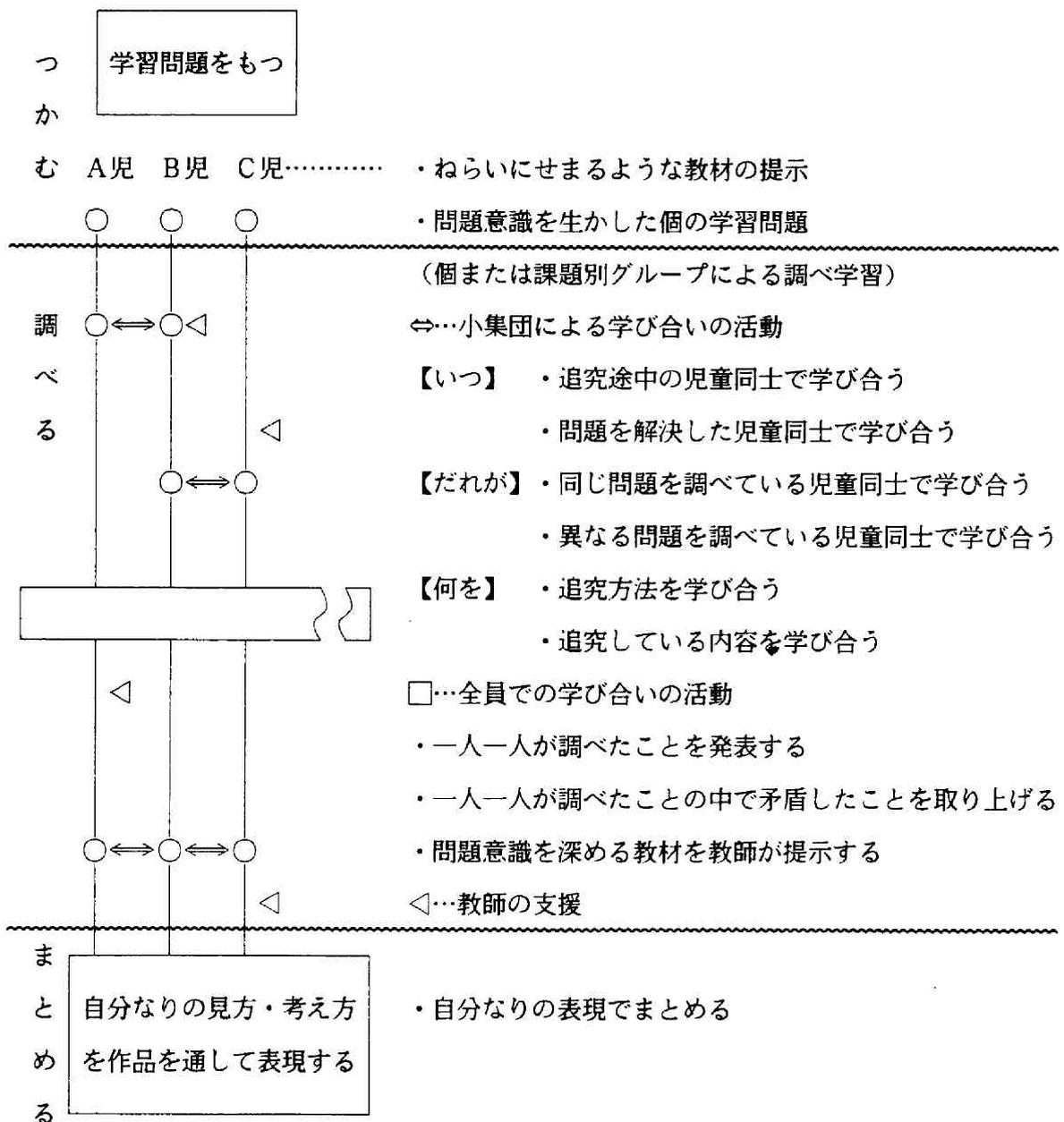
児童一人一人の問題意識の変容を重視しながら、調べる段階で、児童相互の追究方法や追究内容に関する学び合いの活動を設定すれば、児童は意欲的に学習問題を追究することができるであろう。

IV 研究の内容と方法

社会的事象に対する児童一人一人の興味・関心を大切にすることが個の学習の出発点となる。しかし、個の学習を成立させるには、それだけにとどまらず、問題意識を高めていくことや一人一人の追究が一面的なものにならないようにすることが重要である。そのためには、児童が他の見方にふれて広く深く学習することが望ましい。

そこで、「個による問題追究において、児童相互がかかわり合いながら解決していくこと」を「学び合いの活動」ととらえ、調べる段階で取り入れることにした。

1. 多様な学び合いの活動 (※図は、学び合いの活動の一例を示す)



2. 学び合いの活動の方法

- (1) 児童の見学・調査項目一覧表を作成し、追究の方法がわからない児童、資料が見つからない児童へ、同じ学習問題の児童に相談に行くよう促す。
- (2) 見学・調査項目一覧表を掲示して、友達の学習問題を知り、学び合いの活動に役立てる。
- (3) 伝言板に自分の疑問を掲示して、クラスに投げかけ相互に学び合えるようにする。

3. 学び合いの活動の効果

- ・情報交換したり話し合ったりすることで、問題意識が広がったり深まったりする。
- ・追究の仕方を学び合うことにより、解決の方法がわかる。
- ・一人では思いもよらない考えが生まれたり、発見があったりする。
- ・自分の考えが他児童の考えによってゆさぶられ、新たな追究意欲が生まれる。
- ・自分の追究と他児童の追究との関連性を考えることで多面的な見方ができるようになり、社会的事象を深く理解できるようになる。

V 実践事例

1 小集団による学び合いの活動の例（「自動車工業で働く人々」）

本單元における小集団による学び合いの活動を分類・整理すると以下のようになる。

- (1) 追究途中の児童同士で学び合った例
 - ・生産工程を調べている児童が、同じライン上に左右のハンドル車があることに疑問をもち同じことに疑問をもった児童と協力して調べ、その結果外国にも輸出していることに気づき、外国のニーズにも応じる工夫であることがわかった。
- (2) 問題を解決した児童同士で学び合った例
 - ・最近の車のデザインについて調べた児童と、昔と今の車のデザインの移り変わりを調べた児童が学び合うことにより、その時代時代の人の好みに合わせて車のデザインが決められているという考えに確信をもつことができた。
 - ・生産工程について調べた児童と販売について調べた児童の学び合いにより、販売と生産工程には「ジャストインタイム」を通してむだのない生産が行われていることをつかむことができた。
- (3) 同じ問題を調べている児童同士で学び合った例
 - ・値段の決め方について調べている児童が、同じことを調べをしている児童と資料を交換したり、インタビューの様子を教え合ったりして自分たちの追究をふくらませた。

(4) 異なる問題を調べている児童同士で学び合った例

- ・生産工程を調べている児童と車のデザインを調べている児童と値段について調べている児童の学び合いにより、自動車を買う人の手に届くまでに、様々な場で消費者のニーズに応じようと工夫・努力されていることがわかった。

C₁「自動車の貼ってある紙には、どんな部品を取り付けるか書いてあるんだって。工場に働いている人は、あの紙を見ながら仕事をしているそうだよ。」

C₂「うん。メーターでも、針が動くのもあればデジタル式のものもあるんだ。色だって、好きな色にしてくれるんだよ。」

C₃「どんな部品が付いているかによって、同じ種類の自動車でも値段が違うそうだよ。」

C₂「お客さんが注文するとき、カタログを見ながらどんな自動車にするか決められるんだ。」

C₁「買う人の好みに合うように、自動車を作っているんだね。」

- ・値段の決め方を調べている児童が、調べていく中で自動車の種類や名前についてわかったことがあったので、自動車の種類について調べている児童に教えた。

(5) 追究方法を学び合った例

- ・色について調べている児童が、自動車の販売店でインタビューをして解決する方法があることを学んだ。
- ・値段の決め方を調べている児童が、教科書や資料集だけでなく別な資料から調べていく方法があることを学んだ。

C₁「値段の決め方を調べているんだけど、どこにも出ていないの。」

C₂「広告やカタログに出ているわよ。」

C₃「それじゃ、値段はわかっていても決め方はわからないよ。」

C₄「私も同じことを調べているんだけど、資料が見つからなかったの。だから、自動車販売店の人や家の人に聞くことにしたの。」

C₁「そうね。自動車販売店の人に聞きに行けば、教えてもらえるかもしれないわね。一緒に行かない？」

C₄「ええ、いいわよ。一緒に自動車販売店の人に聞きに行きましょう。」

(6) 追究している内容を学び合った例

- ・安全な自動車を作る工夫について調べている児童が、自分の調べていることの他にも安全のため工夫があることを学んだ。

2 全員での学び合いの活動の例

調べ活動において小集団による学び合いの活動により、児童の見方・考え方は広まってゆく。しかし、いつでも多面的に見ることができるとは限らない。そこで、児童の調べた結果から全体の場で相互に関連付けて考える場面が必要になることがある。そのような場合に、全体での学び合いの活動を設定し、児童の見方・考え方を広めたり深めたりするようにした。

(1) 一人一人が調べたことを発表した例（「自動車工業で働く人々」）

一人一人が発表の中に資料の見取りなどを質問として取り入れ、聞いている児童との間に学び合いの活動を行った。

C₁ 「教科書〇〇ページの資料を見て下さい。これは、何という資料ですか。」
C₂ 「豊田市の工場の配置図です。」
C₁ 「豊田市には工場は12ありますが、東京にも□□□の工場はあると思いますか。」
C₃ 「あるんじゃない。だって、□□□の車を売ってるところがあるんだから。」
C₁ 「僕も最初はそう思ったんだけど、実はこの豊田市だけだったのです。」
「なぜ豊田市だけにしかないのでしょうか。そこで、そのことについて調べました。」

このように、発表する側と聞く側のやりとりによって、情報を得たり調べ方を学んだりすることができた。例えばこの場面のC₃児は、消費者と販売の関係を工場とのつながりという視点まで広げることができた。

(2) 一人一人が調べたことの中で矛盾したことを取り上げた例（「日本の漁業と漁場」）

本単元では、全員での学び合いの活動を「一人一人が調べたことの中で矛盾したことを取り上げて話し合う」場として位置付けることにした。前時までに個で追究した学習問題の中から漁業に携わる人の数は減ってきているという結果と漁獲量は増えているという矛盾する結果に注目させ、全体の話し合いを行い、問題意識を深めさせることにした。

具体的には次のような展開があった。

C₁ （自分の調べたことを発表した後）「働いている人がだんだん減ってきていることがわかりました。」
（働く人が減ってきていることについて予想し話し合う）
T 「〇〇さんが調べてくれたグラフを見てみると、漁獲量は減っていないね。働く人は減っているのに、漁獲量が増えているのはどうしてかな。」
C₂ 「働く人が減っても、たくさん魚が取れるように頑張っているんじゃないかな。」

このような話し合いから、働く人の工夫や問題点を学習問題として調べることとなった

(3) 問題意識を深める教材を教師が提示した例（「わたしたちの暮らしと通信業」）

つかむ段階において、日常生活における電話の使われ方を考え、更に電話のつながる仕組みを予想した後、調べる段階で電話会社の見学をすることを前提に追究課題（見学の視点）を設定した。この場合ほとんどの児童は「電話はどうつながるのか」「ファックスはどのようにして文字を送っているのか」といった電話の仕組みや、「電話会社ではどのような仕事をしているのか」「電話会社は全国にどれだけの支店をもち、どれだけの人が働いているのか」等の電話会社の組織に関することをその課題とした。

そこで見学のまとめをした後、教師から「電話が使えなくなったらどうなるか」という疑問を投げかけ、S区での通信ケーブル火災に関する教材を提示した。現場の写真、火災の概要や被害を報じる新聞記事がその主なものであるが、そこには児童が予想していなかった銀行や郵便局、証券会社などの名前が頻繁に出てきた。この学習から「電話通信は他の産業でどのように使われ、どんな影響を与えているのか」「オンラインとは」等、通信と他産業や日常生活とのかかわりにも目を向け、調べるようになった。

VI 研究のまとめと今後の課題

1. 調べる段階に、多様な形の「学び合いの活動」を設定することにより、児童一人一人の問題意識を生かした調査活動を発展させていくことができた。そして、調査を行いながら自分なりの見方・考え方を深めていくことができた。
2. 「学び合いの活動」の前提として、調べる段階は、個または課題別グループによる学習を基本とした。このことは、児童の問題意識を大切にすることも有効であった。
3. 「学び合いの活動」の具体的な方法を明らかにすることにより、一人一人の児童に、その時の状況に応じた柔軟な対応ができるようになった。このことは、一人一人の児童の問題意識を大切にすることも有効であった。
4. つかむ段階においては、児童にとって身近で、主体的な学習ができるような教材を提示するようにした。このことにより、調べる段階での個またはグループによる調べ学習を、ねらいに沿ったものとすることができた。そして、「学び合いの活動」の効果も高めることにつながった。
5. 個または課題別グループによる調べ学習の中で有効な「学び合いの活動」をさせるためには教師の指導助言、支援が大切である。本研究においてもその重要性を再認識させられた。教師の指導助言、支援は、児童の興味関心や一人一人の優れた面を伸ばすようなものでなければならない。具体的にはどのようにあればよいのか、今後の課題としたい。

一人一人の児童が、歴史的事象を自分の見方・考え方で追究する指導と援助の工夫

I 研究主題設定の理由

今日の社会では、様々な情報が氾濫し価値観も多様化している。このような社会においては、児童一人一人に社会的事象について自ら考える力・判断する力を身に付けさせることが重要である。歴史学習においても、単に知識の習得にとどまらず、歴史上の人物の働きや生き方などにその児童なりの理解を深め、我が国の歴史や伝統を大切にすることを育てることが大切である。そこで、本分科会では、一人一人の児童が、自ら歴史的事象について自分の見方・考え方を深めることができるようにしたいと考えた。その際、教師の支援や援助の在り方が重要であると考え、教師の指導と援助に焦点化し、上記の研究主題を設定した。

II 研究のねらい

歴史的事象について自分の考えを表現し、相互に認め合いながら、自分の見方・考え方を見直したり広げたり深めたりするための指導と援助（支援）の在り方を明らかにする。

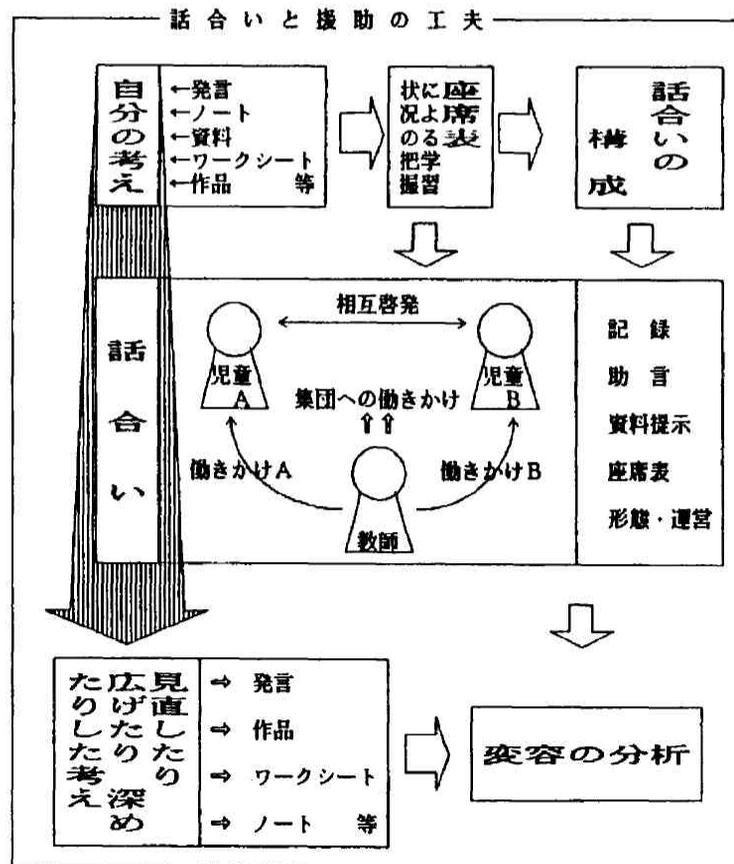
III 研究の仮説

教師が一人一人への働きかけを工夫して、話し合いを構成すれば、児童は自分の見方・考え方を見直したり広げたり深めたりして歴史的事象を追究することができる。

IV 研究の内容と方法

1 研究の内容

児童が歴史的事象に対する見方・考え方を深めることは、自分の考えを見直す、修正する、自分の考えに自信を持つ、考



えが変わるということであるととらえた。それには、話し合いが、有効な活動であると考え、本分科会では、「話し合い」に研究を焦点化した。「話し合い」の効果をまとめると以下の3点が挙げられる。

- 知恵を出し合い、協力して、問題解決ができる。
- 一人一人の児童が歴史的事象に対する見方や考え方を拡充し、深化させることができる。
- 自分とは違った歴史的事象に対する考えや意見があることが分かり、他者に対する理解が深まる。

そこで、「話し合い」を活発にさせるための教師の援助の在り方を考えた。

(1) 「話し合い」の前における教師の指導や援助

- 児童が研究する教材を吟味し選定する。(適時性・具体性・多面性・切実性など)
- 児童一人一人の見方や考え方を見取る。(作品・ワークシート・発言・ノートなどの分析)
- 話し合いの構成を工夫する。(類似・対立したような考えをもつ児童の把握、補助資料・発問・学習活動の準備)

(2) 「話し合い」の過程における教師の指導や援助

- 話し合いが進行している時は、見守り、必要に応じて働きかける。
- 必要に応じて、学級全体、個別に援助を行う。(補助資料、発問、学習活動の提示、指示や助言)

(3) 「話し合い」の後における教師の指導や援助

- 児童の考えの変容を見取る。(発言・ノート・ワークシート・作品・座席表などの分析)
- 意欲をもたせる肯定的な評価をする。例えば、教師の受容的姿勢に加え、児童相互による評価の場を設定する。
- 話し合いにおける内容の深まりをまとめる。留意点として、板書の構成と、まとめる際の視点の明確な指示などが考えられる。

2 研究の方法

観察対象児童を決めて、話し合いの前後で児童の見方・考え方の変容を見取る。

- 教師の観察や児童の自己評価・作品から、友達の見方をどのように受け止めたのかを分析する。
- 児童の見方・考え方の変容と座席表・教材・発問・他の学習活動とのかかわりについて分析する。

V 実践事例

1. 小単元名 6年「織田信長と天下の統一」(7時間)
2. 小単元の目標
 - ①鉄砲伝来や天下統一、楽市楽座に関心を持ち進んで調べようとする。
 - ②信長の人柄や業績の意味を資料との関連で考えることができる。
 - ③長篠の戦い等の資料から気が付いたことを発表できる。
 - ④信長が鉄砲を手に入れ、天下の統一を有利に進めたことがわかる。

3. 研究主題との関連

- (1) 話し合い活動によって見直したり、広がったりした考えの分析(5. 第4時の学習状況)

自分の考えや仮説に立った話し合いを設定し、児童の考えが変容した要因を教材、話し合い、教師の働きかけの視点で明らかにする。

- (2) 人物のイメージに対する変容の分析(6. 話し合い活動と児童の考えの変容)

天下統一の先駆けとなった信長の人柄や様々な業績・歴史的事象を、話し合い活動を通じて広い視野から追究させ、時代認識ができるように工夫した。本実践では特に、信長という人物のイメージを各時間ごとに記述するようにさせ、その変容を追いながらこの時代をどのように認識していったかを把握し、援助に生かすようにした。

4. 指導計画

	時数	主な学習内容	主な教材	援助活動	
				全体に対して	個人に対して
つかむ	第1時	「天下もちの歌の意味を3人の武将年表から考え話し合う。	「天下餅の歌 フロイスのプロフィール	時間の保証、司会の工夫、ノート筆記。	年表手順指導、必要に応じて指名。
調べる	第2時	信長の肖像画から、人物像について考え、自分のイメージを持つ。	肖像画、領土拡大地図 フロイスの信長観	ゲームの話し合いの設定、調べる時間設定	資料読み取りについて机間指導。
	第3時	長篠の合戦を調べ、織田軍が勝ったわけを予想する。	合戦図(プリント) 合戦掛図	合戦図の着色、当時の戦いの話(興味)。	個人的な助言指導
	第4時	鉄砲の使用と、その使い方の工夫で勝利したことを理解する。	合戦掛図 鉄砲の性能(プリント)	鉄砲と弓の性能比較による揺さぶり	机間指導による評価と発表への意欲付け
	第5時	信長の豊かな財力の秘密を予想し、調べる。	豊かな信長、楽市楽座(プリント)	鉄砲の価格への注目	資料の探し方、調べ方に対する助言
まとめる	第6 7時	天下統一への信長の働きについて自分の表現したい方法でまとめる。	これまでの学習の記録	パネル、新聞、はがき、紙芝居、脚本等	個性的な方法の援助。

5. 本時の指導(4/7時)

- (1) 本時の学習のねらい：織田、徳川の連合軍が武田軍に勝利したわけを予想し、資料の活用や、話し合いを通して、鉄砲の使い方の工夫によるものであることをつかむ。
- (2) 観察対象児童A男についてのプロフィール：通常、授業中の発言はあまり見られないが、ノートにきちんとメモを取りながら他人の意見をよく聞いている。思考力に優れ、自分の興味のあることには熱心に取り組む。資料の読み取りの力にも優れている。

(3) 学習の流れと児童の思考の変容 本時の指導にあたり、前時までの学習状況から、次の

二点を考慮し、授業の中に話し合いを設定した。

まず、前時までの児童の考えを把握し、考えを見直すもとなる資料2種類と確かめのための資料を準備した。第二に、話し合いの場を設定し、

観察対象児に対して、

学習の流れ→	連合軍はなぜ武田軍に勝ったか。	当時の鉄砲について弓と比べてみよう。	鉄砲は勝利の要因だったのだろうか。	ビデオで合戦の様子を見てみよう。	今日の学習のまとめ
	・話し合い	・火縄銃と弓の性能比較資料 ・話し合い	・火縄銃発射時間の資料 ・話し合い	・ビデオ資料	・まとめ作業
A男の思考	①連合軍が有利	②弓の方が有利	③弓矢より速いから火縄銃が有利	☆どのように鉄砲を使っているのか。を視聴する。	④まとめ 火縄銃を使って撃ち方を工夫したので勝利した。この工夫が天下統一の基礎になったのだと思いました。
変容の要因	前時のK男の発言 【話し合い】	S男、H男の発言 【資料】 【話し合い】	I子の発言 【話し合い】	T子の発言 【資料】 【話し合い】	

〔第4時における学習の流れとA男の思考の変容〕

話し合いにおける意図的な指名や、ノートにまとめる際の助言を含めた教師による支援活動を取り入れた。以下に、A男の1時間の思考の変容について簡単に述べる。

①「織田軍がどうも有利だ。」(自己の考えの構成)

前時の学習では『長篠の合戦図』を見てどちらが有利かという予想を行った。ここでA男はK男の「火縄銃が多い」という発言を聞いて織田と徳川の連合軍が有利だという予想をもち、本時が開始されている。このことから話し合い活動によって自分の考えがもてた。

②「さてよ。弓の方が鉄砲より有利かな？」(自己の考えの見直し、変更)

ここでは教師の提示した『火縄銃と弓の性能比較』の資料をもとに、話し合いを行った。話し合いでは「やはり火縄銃が有利」とする考えと、「有効射程から弓が有利」とする両意見が出された。だまって聞いていたA男は、後者の意見と資料をもとに「弓の方が有利」とノートに記録している。資料をもとにした話し合いで、自分の予想を見直し、変更した場面である。

③「弓より火縄銃の方が、速く発射できるから有利なんだ！」(考えの再修正と理由づけ)

次に教師から『火縄銃の発射にかかる時間』に関する資料が出され、火縄銃の発射にかかる時間と騎馬隊のスピードとの比較をもとに、話し合いがなされた。ここでI子から「三段で分かれて連続して撃てば、時間が短くて撃てる」という作戦に関する意見が出された。この意見を聞いていたA男は火縄銃発射の工夫という根拠をもとに織田、徳川の連合軍が有利という考えをもった。そしてその考えでビデオで合戦の様子を確認し、まとめとして表中④のような意見を記述して学習を終えた。本時はA男の考えが最も揺さぶられた時間である。

6. 信長に対する人物像の変容

本実践では、話し合い活動を随所に設定し、児童の思考の変容を探った。ここでは、特に信長に対する人物像と話し合いについての感想を各時間記録させた。

このことから、資料や話し合いが児童の人物イメージの変容に、次のような観点で深くかかわりがあることが分かった。

(1) 新たな自分の考えを持つ。

B男は表中の第2時における考えに見られるように、友人の発表から、「プライドが高い」とか、「戦力が強い」という考えをもっている。ここでは、肖像画や、領地の拡大地図の資料をもとに話し合っており、これらは、友人の意見の中からB男が、自分の考えとしてイメージしたものである。

(2) 自分の考えを深め、より確かなものとする。

第4時のC男の考えでは、前時の最後に自分の考え〔信長に対するイメージの変容〕として「長篠の合戦は、鉄砲のある連合軍が有利」との予想から始まった。ここで、資料をもとに話し合いがなされた結果、B男は「やっぱり信長は強い。鉄砲隊が交互に撃ったので有利」と自らの考えをより確かなものとした。

(3) 自分の考えを広げる。

児童は、話し合いによって幾つかの情報や意見を集約し、自分の考えに生かす変容が見られた。例えば、第4時のB男は自分が資料から気づいた「三千の銃があった」という事実に合わせて「3人が交代で撃つ」という意見を合成し、「信長はすごい」という考えをもった。

また、信長の強さや戦い好きに着目していたC男は第5時で、「銀山開発や商人の保護政策を進めていた」という内容を合わせて、その金で「武器の調達や、戦費とした」と考えた。このことは、当初の自らの考えを拡大していったと考えることができる。

(4) 今までの自分の学習したことをまとめ、結論に発展させる。

学習の最後に、B男はそれまでの「かわいそう」「プライドが高い」「すごい」「尊敬した」という各時間のイメージを基に、この時代の様子をグループで話し合い、信長が天下統一のための基礎固めをしていった事象と信長に対する人物評を統合し、新聞にまとめた。

時間	B 男	C 男
①3人の比較年表と天下餅のうた	あともう一歩と言う所で倒されてしまったから、ものすごくかわいそう。	光秀に負けてしまっただけで体は切った自殺した。
②勢力の拡大と信長像について	戦力が強い。プライドが高い。	信長は占領地を増やした。戦いが好きな人。すごい人だと思った。
③長篠の合戦の様子と勝敗の行方	信長は頭がいい。	地図を比べて、すごく強い人ということに気がきました。
④長篠の合戦勝利の秘密	銃を集めたのもすごいし3人で交代で撃つと考えたのはもつとすごい。	前と合せてやっばり強くて鉄砲隊が交互で撃ったので有利だと気付いた。
⑤信長の経済政策について	税が沢山入るようになって金を手に入れたすごい。信長の事を尊敬した。	銀山の開発と商人の保護で税を取り、その金で火縄銃を手に入れた。
⑥⑦信長の天下統一への歩み	ものすごく頭がいい人。戦いの仕方や資金集めがちゃんどできる人。	顔を見ていると競争とかやらない人に見えるけど地図を見るとよくやる。

VI 研究の成果と今後の課題

話し合いを取り入れた学習の成果と今後の課題として、以下の4点が挙げられる。

1. 教師が支援者に徹し、話し合いを構成することにより、話し合いが活発になる。

十分な教材・資料の吟味と、座席表による児童の反応分析に基づいて、話し合いの場の設定、個人への指名や助言を積み重ねることによって、話し合いが活発になった。

2. 意欲的な追究が展開される。

自分の考えが学級の中で認められたり、自分とは異なる考えを聞き、知識を再構成したりする過程で、意欲的に追究できるようになった。

3. 多面的思考が促され、事実認識が深まる。

話し合いの中で、友達の考えを知ることにより、様々な考え方があることが分かり、歴史的事象の持つ意味が明確になった。実践例にも表れているように「騎馬隊・弓の方が有利」と考えていた児童が、話し合いの中で、信長の鉄砲の使い方や戦い方の工夫を友達から聞き、「やはり鉄砲隊の方が有利」と考えが変わり、鉄砲の有効性に着目するようになった。

4. 話し合いの有効性を見取る評価について研究をさらに深め、新しい評価観に基づいた一人一人に合った支援のあり方を明らかにしていきたい。

第6学年B分科会

一人一人の児童が、歴史的事象について自ら考える力を身につけるための指導の工夫

I 研究主題設定の理由

21世紀を目指し、社会の変化に主体的に対応できる心豊かな人間の育成を図ることをねらいとしている新教育課程が今年度より実施された。生涯学習社会移行期にある今、その基礎を培うという視点から、「自ら進んで考え、判断し、自信をもって表現したり行動したりできる創造的な資質や能力の育成」が、学校教育の場に強く求められている。

6年児童の歴史学習についての実態を調査してみると、多くの児童は興味・関心を示し、楽しいと感じている反面、資料から得た知識で満足している傾向が強い。そして学習活動においても、活動そのものを楽しんでいるが、自分の考えを深めるまでに至っていない。

そこで、新しい学力観に求められている「思考力を育成する」という観点から、本分科会では、授業の中で一人一人の児童の興味・関心を大切に、個の学習を成立させ、「歴史的事象について自ら考える力」を育成していくことを目指し、上記研究主題を設定した。

II 研究のねらい

一人一人の児童が、歴史的事象について自ら考える力を身につけるための指導の在り方を、教材構成の工夫を通して明らかにする。

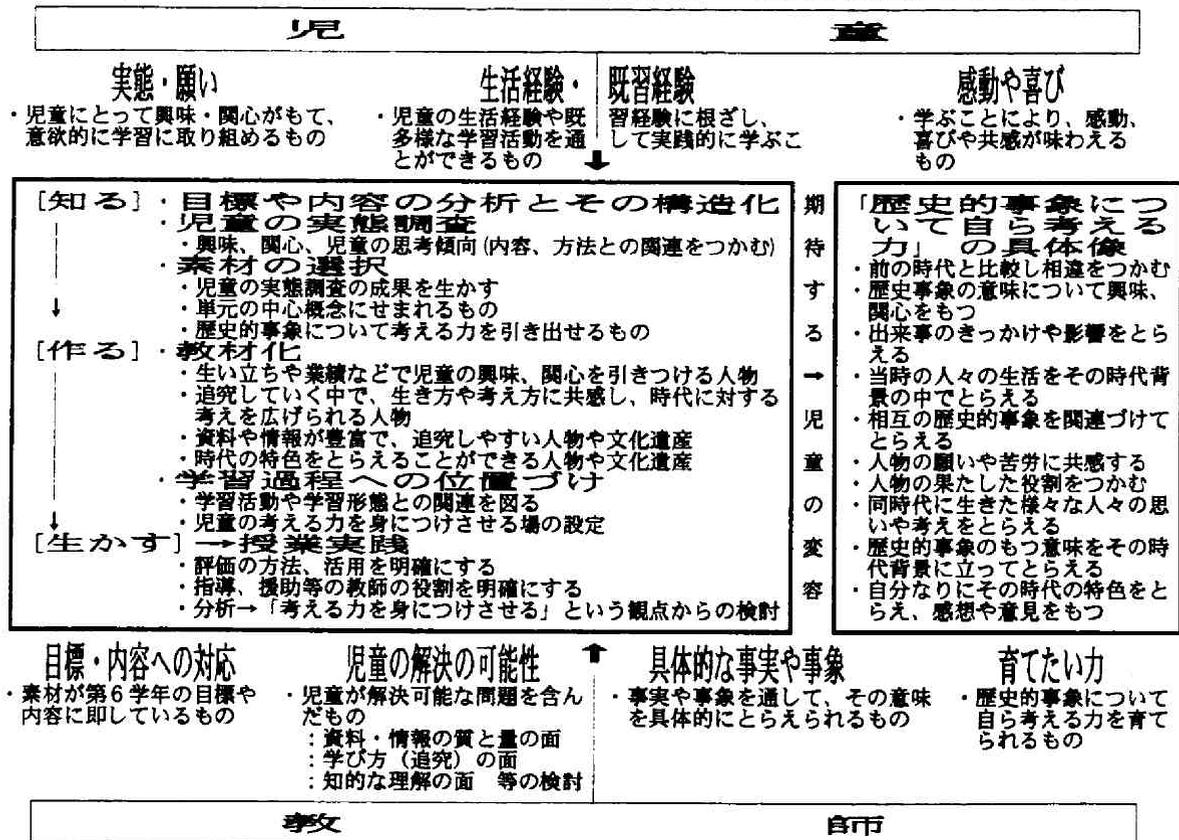
III 研究の仮説

児童の興味・関心や思考傾向に即した教材を選択し、個の学習を成立させる学習活動と関連させながら、指導計画に位置付けることにより、児童は、歴史的事象について自ら考える力を身につけることができる。

IV 研究の内容と方法 ～ 6年「徳川家光と江戸幕府」の実践事例を通して～

児童にその時代の特色を理解させ、自ら考える力を身につけさせるためには、児童の興味・関心に根ざし、意欲的に学習に取り組みたいという願いに応じた学習を成立させることが大切である。本分科会では、児童の興味・関心や今までの学習で見られた思考の傾向を踏まえて教材を選択し、児童の思考の流れを考慮して学習過程に位置づけるとともに、思考の深まりや広がりをも促す学習活動を組み入れることを「教材構成」ととらえた。

考える力を身につけさせるための教材構成の在り方



1. 児童の側に立つ教材の選択

一人一人の児童が、歴史的事象について自ら考える力を身につけるための指導の工夫として、本実践では、考える対象となる教材を児童の興味・関心や学習場面で見られる思考の傾向に即して選択することから行った。実態調査は、質問紙法に加え、授業記録や個々の作品分析を通して児童が身につけている「考える力」を具体的に教師がつかめるように配慮した。教材は、これまで教師の意図により選択され、指導計画に位置付けられることが多かったが、多様な個性や個人差のある児童にとって、実態に対応できない教材も少なくなかった。そこで、教材の選択にあたり、児童の実態を①～⑨と明らかにした上で、教師側が身につけさせたいと考える力(1)～(9)との関連を明確にできるようなマトリックスを下図のように作成した。

	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	計	選択	計	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)		
△児童の実態▽	△という具体的な歴史的事象・事象から目にする	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	△という歴史的事象・事象を比較して考える	
△育てたい力▽	(1) 初め時代と比較して相違を考察する	(2) 人物の個性や嗜好を考察する	(3) 歴史的出来事や出来事の原因を考察する	(4) 人物の個性や嗜好を考察する	(5) 人物の個性や嗜好を考察する	(6) 同時代に生きた様々な人々の思いや考えを考察する	(7) 自分や周りの人々の個性や嗜好を考察する	(8) 歴史的出来事や出来事の原因を考察する	(9) 自分や周りの人々の個性や嗜好を考察する														
△本実践で取り上げた教材▽																							
大名行列	●									4	★★	5	○	○	○							○	大名行列
参勤交代	●									4	☆	3	○	○	○							○	参勤交代
武家諸法度	●									5	☆	1											武家諸法度
家光の生い立ち						●	●			2		1										○	家光の生い立ち
大名の改易						●	●	●	●	4	★★	6	○	○	○	○						○	大名の改易
大名配置						●	●	●	●	4	★★	7	○	○	○	○						○	大名配置
幕府のしくみ						●				2		4	○									○	幕府のしくみ
キリスト教禁止						●		●	●	4	☆	2		○								○	キリスト教禁止
踏絵						●		●	●	3	★	3	○	○								○	踏絵
出島とオランダ貿易	●							●	●	4	★★	5	○	○	○							○	出島とオランダ貿易
島原の乱						●	●	●	●	4	☆	1				○						○	島原の乱
鎖国令						●	●			3		2		○	○							○	鎖国令
年貢の取り立て	●	●						●	●	4	☆	4	○	○	○							○	年貢の取り立て
五公五民	●	●	●					●		4		3	○	○								○	五公五民
慶安御触書	●	●	●					●	●	5	★	2	○									○	慶安御触書
農民・町人のくらし	●	●						●	●	4	☆	4	○	○								○	農民・町人のくらし
五人組	●	●						●	●	4		2	○									○	五人組
士農工商	●	●	●					●	●	5	★★	6	○	○	○							○	士農工商
身分差別	●	●						●	●	4		1	○									○	身分差別

2. 児童の興味・関心に基づいた選択を可能にする複数の教材の提示

本実践では、上記のマトリックスから、大名行列・大名配置・踏絵・出島・慶安御触書・士農工商の6つの教材を選択し、導入資料として提示した。これらの教材は、幕藩体制確立のために、家光が行った政策にかかわる資料であり、どの教材を窓口にしても他との関連を考えることで、武士の世が安定したという概念をとらえることにつながると考えた。そこで、児童の多様な興味・関心を生かし、さらに多面的・多角的な思考を引き出すために、複数の教材を提示し、児童が自ら教材を選択しながら追究できるように指導計画に位置づけた。

3. 児童の思考の流れを大切にしたい弾力的な指導計画の作成

児童が自ら選択した教材と意欲的にかかわり、その教材がもっている意味を追究する中で、歴史的事象について自ら考える力を身につけるためには、一人一人の児童の思考の流れを大切にしたい弾力的な指導計画を作成することが必要であると考えた。

本実践では、教材の構造が・大名統制・鎖国・身分制度という徳川家光の政策を並列的に扱ったものであることと、教材によって児童の興味・関心の差が大きいという実態を考慮し、次のページに示すような複線型の学習過程を編成した。個々の課題を追究する際には、教師側が作成した補助資料を、児童がいつでも必要に応じて活用できるように教室に置き、学習環境を整えるように配慮した。また、自分で見付けてきた資料を使えるように励ました。学習形態については、個人で追究したり、同じ課題をもったグループで追究したりできるように配慮した。

学習過程では「つかむ — 調べる — まとめる」を基本的な分節としながら、調べる段階に重点を置き、「歴史発見カード」にどの資料を使ってどのようなことを調べたかを記入するようにさせた。教師は、児童の学習の様子や使った資料・思考の様子を見取り、ねらいに即して児童の思考をさらに深められるように援助した。

4. 考える力を高める情報交換活動

児童が自分の考えを深める活動として、情報交換の場を設定した。ここでは、自分の調べたことを説明したり、友達に質問したりして、さらに調べたいことを明らかにすることをねらいとし、児童が相互に学び合う場が必要であると考えた。

本実践では、導入資料とそれについて調べた「歴史発見カード」を一覧できるように掲示した。児童は、すべてのカードを読みながら、自分が調べたこととの関連を考え、質問や気付いたことを「アドバイスカード」に書き、友達のカードに貼った。そして貼られた「アドバイスカード」から、さらに調べたいことが見付かるように情報交換をした。

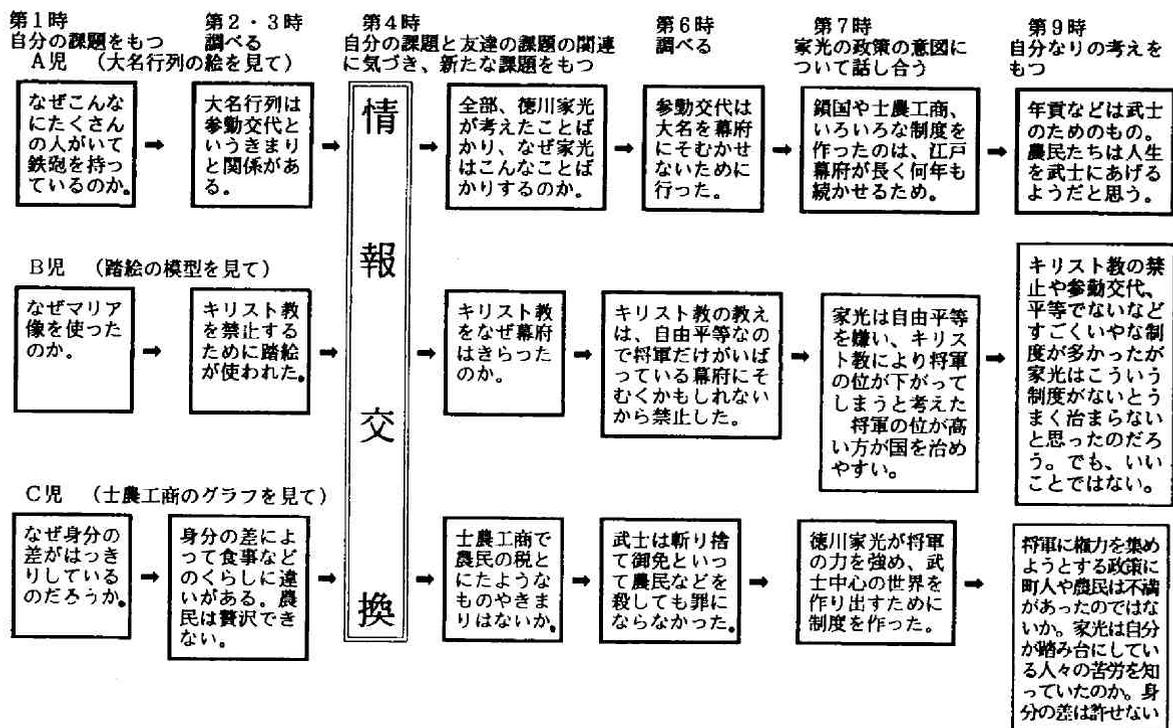
一見関連のなさそうな複数資料から調べていくうちに、いくつかの基本要素にしばられ、さらに、この情報交換の場で自分の調べたことと友達の調べたこととの意外な関連性を発見した。また、友達から質問を受けることにより自分がさらに調べたい事ははっきりしてきたのである。この時教師は、児童相互の関連を示唆し、新しい課題に気付かせることができるように一人一人の児童を見取り、援助した。

従来の学習活動に加え、このような活動の場を設定することで、児童の考える力を高めていくことができると考えた。

5. 本実践における指導の実際と児童の反応

ねらい	学習の流れ・内容	◎主題とのかかわり ○反応
<p>つかむ (1)</p> <p>6つの基礎資料をもとに、気づいたことを話し合い、自分の課題をもつことができる。</p> <p>(課題把握)</p>		<p>◎児童の興味・関心に基づいた選択を可能にする複数の教材を提示することにより児童の意欲的な学習を促すとともに、多面的、多角的な思考を引き出す動機付けを行った。</p> <p>○なぜこんなにたくさんの方が行列しているのだろう。</p> <p>○なぜ日本なのに外国の旗が立っているのだろう。</p> <p>○なぜ身分の差がはっきりしているのだろう。</p>
<p>調べ (5)</p> <p>自分の課題を追究しながら友達と調べたこととの関連を考察することができる。</p> <p>(追究)</p>		<p>◎児童の思考の流れを見取り追究に必要な資料を準備したり、課題意識を高めるような援助をしたりした。</p> <p>○外国の旗はオランダが長崎の出島で貿易を許されたから立っている。</p> <p>◎個々の児童が追究してきたことを情報交換することによって、歴史的事象を関連づけて考え、さらに中心概念に迫るような課題意識をもつことができるようになった。</p>
<p>自分の調べたことを説明したり、友達に質問したりして、さらに調べたいことを明らかにすることができる (3/5)</p> <p>(関係把握)</p>	<p>情報交換</p> <p>家光の資料 (肖像画、生い立ち、年表など)</p>	<p>○全部見ていくと徳川家光が考えたことばかり、なぜ家光はこんなことばかりするのか。</p> <p>◎これまで調べてきたことの関連を徳川家光の政策という視点から話し合わせ、幕藩体制の確立について多角的、多面的な思考ができるようにした。また身分制度については差別の様子を知り、その不合理さについて共感的に理解できるようにした。</p>
<p>まとめる (3)</p> <p>自分たちが調べたことが江戸幕府の幕藩体制を確立するための徳川家光の政策であったことを理解することができる。</p> <p>(集約)</p>	<p>大名の統制や身分制度の確立、鎖国の完成により、徳川家光の時代に江戸幕府の封建的な幕藩体制が確立された</p>	<p>○いろいろな制度を作ったのは江戸幕府を長く何年も続かせるためなんだ。</p> <p>○自由平等という教えを広めるキリスト教は、国を統一する幕府にとってじゃまだだったので禁止したのか。</p>
<p>家光の政策について、その意図や当時の人々の気持ちを考え、自分なりの意見や感想をまとめることができる。</p> <p>(自己表現)</p>	<p>家光がとった政策を人々はどう感じていたのだろう</p> <p>自分なりの意見・感想</p> <p>・家光について ・江戸時代について ・当時の人々の立場から ・現代と比べて (自分たちの生活) ・人間としての生き方として</p>	<p>◎学習を通して理解したことから、児童が生き方に関わるような感想がもてるようになった。</p> <p>○この時代は一部の人は平和だったかもしれないけど、全部は違うと思う。本当の平和は身分の差がなくなることだと思う。</p>

6. 本実践における観察対象児の思考の流れ



VI 研究のまとめと今後の課題

1. 新しい単元に入る前に、前単元までに見られた児童の思考の傾向をつかみ、教師が身につけさせたい「考える力」との関連において、教材を選んだ結果、児童は興味・関心をもってそれぞれの教材を意欲的に追究する糸口を見付けることができた。
2. 児童一人一人が課題解決のために調べる段階では、児童の思考の流れを大切にしたい指導計画を作成することによって、意欲的に追究し、複数の教材相互の関連に気づきながら、中心概念にせまることができた。
3. 情報交換の場においては、友達の作品を資料としたり、解決の糸口となるアドバイスをもらったりする活動を取り入れることにより、調べたことを発表し合うだけでなく、自分と友達の課題を関連付けたり、さらに自分の考えを深めたりすることができた。
4. 一人一人の児童が、歴史的な事象について自ら考える力を身につけるための指導の工夫について、教材構成の在り方を中心に研究を進めてきた。本研究では、教材構成の中で考える力を高める場として情報交換の場を設定した。今後、情報交換の場だけでなく、選択した教材の良さを生かしながら児童の思考力を高めるために有効な学習活動を模索し、指導計画の中にどう組み入れていくか、その手だてを明らかにしていきたい。